

変化する人間と鯨の関係 アラスカ先住民イヌピアットの事例を中心に

岸上伸啓（国立民族学博物館・人間文化研究機構）

人間と人間以外の動物との関係は近年、大きく変化してきた。人間は多様な環境のもとで生きるために、野生動物や家畜を食料資源やその他の生活資源として利用してきた。一方、その関係は19世紀半ばに家畜動物への虐待に対する反対運動がイギリスで始まり、その後「動物福祉」の運動を生み出した。また、1970年代以降には「動物の権利」に関する運動が活発化した。このような流れの中で人間と動物の関係は大きく変化し始めた。この流れは、人間と鯨の関係に顕著に見られる。20世紀後半には日本や欧米諸国の商業捕鯨に対する反対運動が盛んになり、近年では世界各地の先住民による捕鯨活動にも大きな影響を及ぼしている。なお、鯨はヒゲクジラとハクジラに大別され、現在では約85種に分類されているが、ここではクジラ全般を指す場合に「鯨」と表現する。

本発表では、アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラの関係を事例として、人間と鯨の関係の歴史的变化について考察を加える。ホッキョククジラ（学術名 *Balaena mysticetus*）とは、成獣で体長が約15メートル、体重が約50トンになるヒゲクジラの一種である。1986年のレッドリストでは絶滅危惧種と分類されていたが、生息数が増加したため、2008年の同リストでは低危険種（絶滅の恐れもなく、近い将来絶滅危機に瀕する見込みが低い種）のひとつに分類されている。アラスカ先住民のユピートやイヌピアットにとってホッキョククジラ（以下、クジラと略称）は重要な食料資源でありかつ重要な社会・文化的資源であるため、現在でも捕獲している。

ベーリング海域で越冬するクジラのグループは、春から秋にかけてチクチ海やボーフォート海で過ごす。このため、春には北上し、秋には南下するという季節移動を繰り返している。ベーリング海峡やチクチ海、ボーフォート海の沿岸に住む人びとは、紀元後10世紀前後から積極的にクジラを捕獲するようになったことが考古学的に知られている。この地域に住む先住民はクジラを食料資源として1000年以上にわたって利用してきたため、特別な鯨観を形成し、特別な関係を持ち続けてきた。

20世紀に入ると欧米諸国における人間と鯨をめぐる関係は、鯨を保護することに重きを置くようになり、現在では捕鯨を容認しない社会的風潮がグローバルに顕著化しつつある。一方、イヌピアット社会のような先住民社会においては、鯨は食料や儀礼、アイデンティティの維持のために必要であり続いている。例

えば、報告者の調査地であるアラスカ州最北端にあるバロー村のイヌピアットの捕鯨者は、春季と秋季に近海を回遊するクジラを捕獲している。この捕鯨は、国際捕鯨委員会（IWC）が6年ごとに鯨種や捕獲頭数を検討し、捕獲上限枠を設定している「先住民生存捕鯨」（Aboriginal Subsistence Whaling）として実施されている。イヌピアットによるクジラの利用を歴史的に見ると、大きく3つの時代に区分できる。その3つとは、非利用および非積極的利用の時代（～10世紀以前）、積極的利用の時代（10世紀～20世紀後半）、保護しつつ利用する時代（20世紀後半～）である。この大きな変化は、商業捕鯨の歴史的展開や温暖化など環境の変化、動物をめぐる思想の変化と複雑に相互に関係しながら、生み出されてきた。

世界各地の人間は、10世紀頃になると、それまでほとんど接觸のなかった鯨を、気候変動や技術・社会制度の高度化に伴って捕獲の対象とし、利用するようになった。当初は収奪的利用であったが、総数が減少するに従い、20世紀に入ると管理しながら持続可能な利用をめざすようになった。しかし、気候の温暖化や人間による鯨の過剰捕獲、「動物福祉」や「動物の権利」に基づく反捕鯨運動の拡大の結果、鯨は保全や保護の対象とみなされるようになった。このように人間と鯨の関係は、時代とともに無関係から致死的利用関係へ、そして非致死的利用関係や非致死的非利用関係へと中心が移行してきた。一方、アラスカ先住民らは、現在でも特定の規制の下で捕鯨を継続しているが、地球の温暖化とそれに伴う人間の北極地域での経済活動および反捕鯨運動の拡大が、彼らの捕鯨活動に負の影響を与えている。

人間の生産活動が生み出したと考えられる地球規模での環境の変化と人間社会の変化は、相互に影響しあいながら鯨と人間の関係を形作ってきた。その相互関係やそれにかかる諸アクターとの諸関係は、時代とともに変化し、複雑化しつつある。鯨を保護しつつ利用する時代には鯨の生息数は増加する一方で、イヌピアットのような先住民捕鯨者にとって制限付きの捕鯨となり、その実施は困難になりつつある。イヌピアットとクジラの関係は変容しつつあり、クジラとの関係に基づいたイヌピアットの生き方や価値観、社会関係が根本的な変更を余儀なくされつつある。

（参考文献）

岸上伸啓 2014 『クジラとともに生きる アラスカ先住民の現在』 京都：臨川書店。

キーワード 鯨、捕鯨、イヌピアット、アラスカ、人間—鯨関係、変化